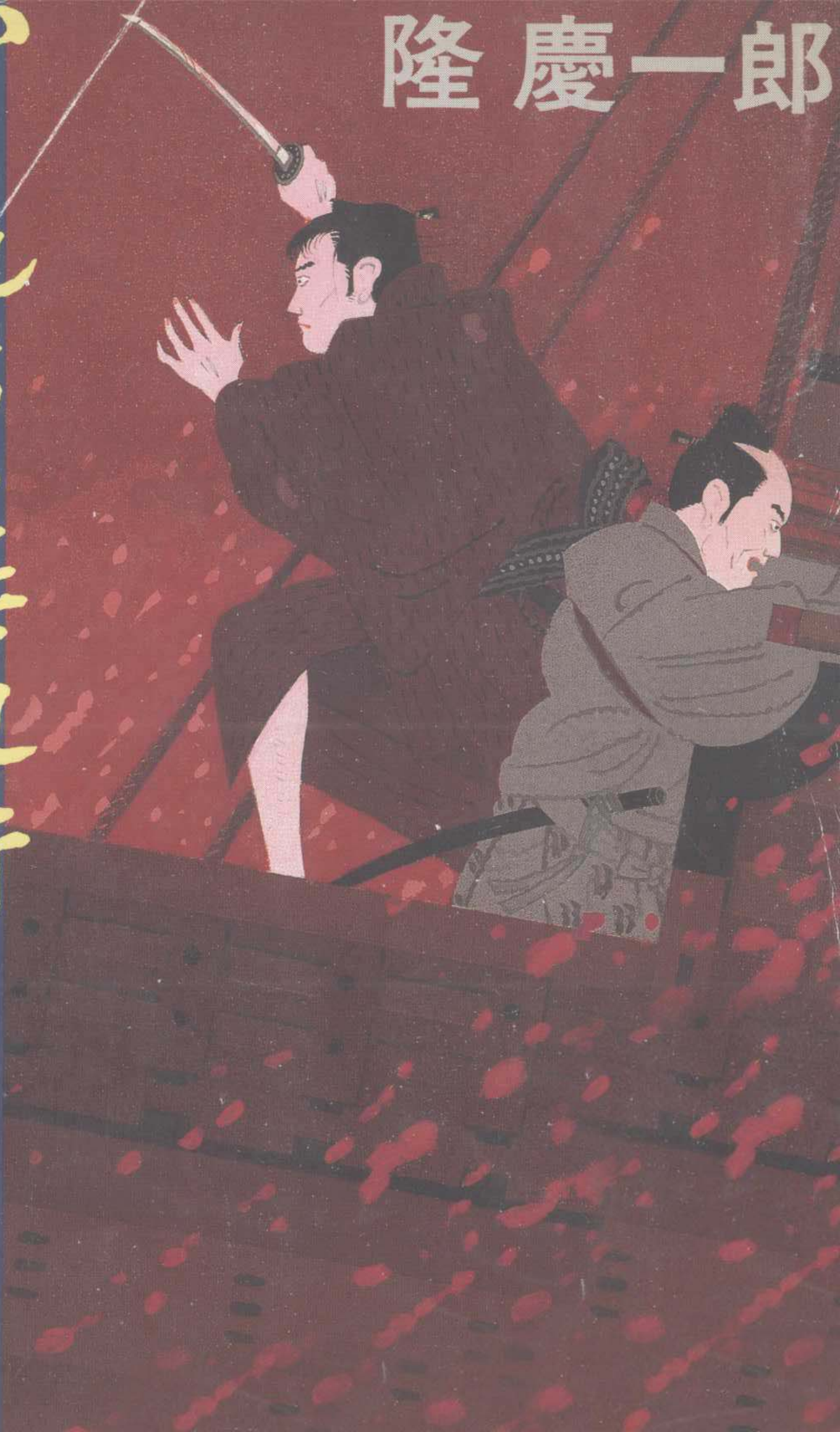
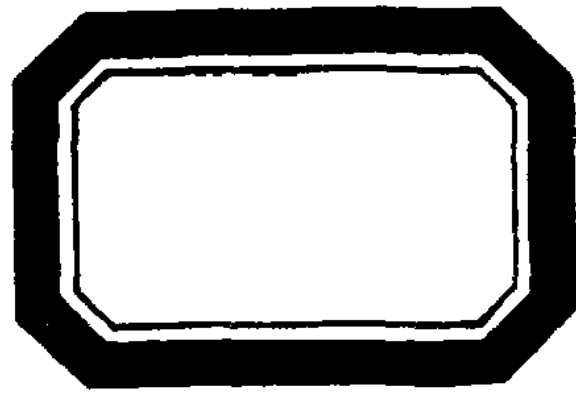


隆慶一郎

かくれろと苦界行

新潮文庫





かくれさと苦界行^{くが}

新潮文庫

り - 2 - 3



平成二年九月十五日 印刷
平成二年九月二十五日 発行

著者 隆^{りゅう} 慶^{けい} 一^{いち} 郎^{ろう}

発行者 佐藤 亮 一

発行所 株式会社 新潮 社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
業務部(〇三)二六六―五二一
電話 編集部(〇三)二六六―五四四〇
振替 東京四―八〇八番
価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛て送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・大日本印刷株式会社 製本・憲専堂製本株式会社

© Jun Ikeda 1987 Printed in Japan

ISBN4-10-117413-X C0193

文庫

かくれさと苦界行

隆 慶一郎 著



新 潮 社 版

かくれさと苦界行

〔登場人物〕

松永誠一郎 〓 棄て児の身を二十五才まで肥後の山中で宮本武蔵に育てられ、武蔵の書状を持つて訪れた江戸・吉原で裏柳生との争いに巻き込まれる。のち見込まれて吉原惣名主となり、西田屋三代目・庄司又左衛門を名乗る。二天一流の達人。実は後水尾院の遺児。

幻斎 〓 吉原の主とも言ふべき老人、実は死んだはずの吉原創始者・庄司甚右衛門。傀儡たちの自由と平等の砦としての吉原を徳川家康の許しで作り上げ、家康の秘密が隠された「神君御免状」を所持している。唐剣の遣い手。

おしゃぶ 〓 庄司甚右衛門の娘と西田屋甚之丞との間の娘。幼児期より未来を見抜く異能を持つ。誠一郎の妻。

野村玄意 〓 吉原を守る戦鬪集団・首代たちの束ね役。三浦屋四郎左衛門、山田屋三之丞、並木屋源左衛門らと共に、吉原の中心人物。

柳生宗冬 〓 柳生家の当主。邪剣を振る弟義仙を憎み、誠一郎に好意を持って新陰流の奥義を伝える。

柳生義仙 〓 柳生宗矩の六男で、宗冬の弟。吉原を取り潰すべく暗躍する裏柳生統帥だったが、誠一郎との闘いで右腕を切り落とされ、逼塞している。

酒井忠清 〓 老中。「御免状」の存在を知り、権力に任せて奪い取ろうと義仙を操る。

妻
順
に

川

祓

大川（隅田川）では、例年六月の晦日になると御祓が行われる。江戸各所の神社が、神主と氏子の者でそれぞれ舟を仕立て、両国川を宮戸川へさかのぼる。舟の中で神主が祝詞を誦し、終ると氏子たちが形代を川へ捨てる。形代は藁人形で、人々は自分の罪障や病い、苦しみや悲しみの一切をこの人形に転移させ、それを大川に流すのである。六月祓、夏越ともいった。

寛文三年（一六六三）旧暦六月晦日の真昼時。

暑かった。

瓜や西瓜・夏桃を売り歩く男の間延びした売声が、よけいその暑さをかきたてている。碧く晴れ上った空に、雲の峯が湧いていた。

松永誠一郎は江戸町一丁目の待合の辻で、縁台に腰をおろし、川祓に同行する人々を待っていた。誠一郎、この時三十二才。本来ならとうに町人姿になっているべきだったが、頑固に昔ながらの素浪人の風態を捨てず、双刀を落し差しにしていた。左手に形代を二つ握って

いる。一つは自分、一つはおしやぶのものだ。自分に形代が必要なことは納得出来る。新吉原へ来てから今日まで六年、夥しい数の男を斬った。直接間接に、自分のために死なねばならなかった女も二人いる。一人は勝山であり、一人は高尾である。高尾は四年前の万治二年、仙台侯伊達綱宗に身請けされた上で殺されている。永年いいかわした情人のいることが判明したためだといわれるが、事実ではない。誰よりも誠一郎がその虚偽であることを知っている。高尾は誠一郎に心中だてして殺されたのである。

「どうしても、あの方に、主さんがいっち好き、とはいえんせん」

落籍がきまった時、大三浦屋まで祝いに行つた誠一郎に、高尾が呟くように囁いた言葉である。これが高尾の心中だてだった。心中とは本来情死という意味ではない。女が男にまごころを捧げることが意味した。この言葉が情死、或は相對死として使われるようになったのは、十七世紀末、貞享・元禄の頃のことである。

遊女にまことなし、と云う。だがすぐれた太夫ほど、そのまことのない、いや、あつては生きてゆけぬ世界の中で、ただ一筋のまことを貫き通そうとするものだ。

『間夫がなければ女郎は闇』

とは歌舞伎十八番の『助六』に登場する花魁揚巻が、髭の意休に叩きつける痛烈な台詞だが、この一方的ともいえる心中だてによって、遊女は泥中に一輪の清冽な花として誇り高く咲くのである。遊女たちはそのために、文字通り生命を賭ける。高尾の死はまさしくそれだった。

「流しても流しても、わしの罪は消えまい」

誠一郎は自分の年齢と名前を書きつけた形代を沁々しみじみと見た。本心、罪障を消したいとは微塵みじんも思っていない。生きている限り、罪の意識をしつかり背負ってゆくことが、自分のために死んでいった者たちへの、せめてもの償いではないか。

だが……。

誠一郎はもう一つの形代を見て、ふっと微笑わらった。そちらには、おしゃぶの名と年齢が書かれてある。おしゃぶは今年やと十五になった。この不思議な予知能力を持った娘に、大川に流すべきなんの罪障があるというのだろうか。元吉原に生れ、新吉原で育ち、それこそ虫一匹踏みつけぬように、優しく心を配って生きて来た娘である。

「おしゃぶには、形代なんか要らないな」

昨夜、閨ひなの中でそう云ったために、長い云い争いになってしまった。おしゃぶは熱くなつて、元々女は罪障の深いものだという仏説を説く。女性にょしやうは三千世界の罪障を一身に背負っているというではありませんか。誠一郎が戯たわむれ半分、それは僧侶そうりよの女に対する煩惱ぼんのうの強さを示すだけだと云うと、おしゃぶはむきになって反駁はんぱくする。むきになればなるほど可愛かわいくて、到頭とうとうしまいに抱え上げて自分の上にのせてしまった。下からそつと貫きながら囁いた。

「じゃあその罪障の深いところを、自分で見せておくれ」

おしゃぶはそれこそ全身を恥かしさで染めて、ぴくりとも動かない。ただただ誠一郎にしがみついているだけである。それでも誠一郎が意地悪く、一切の動きを断っていると、漸ようやく

かすかに軀^{からだ}をゆすり出し、やがて小さな悲鳴をあげ始めた……。

誠一郎は五年前の明暦^{めいれき}四年の春、京から戻るとすぐ正式に西田屋の養子になり、西田屋三代庄司^{しょうじまたざえもん}又左衛門^{えもん}を名乗った。幻齋^{げんさい}こと庄司甚右衛門^{じんえもん}の父の名を貰^{もら}ったのである。おしやぶとはその時、形ばかりの婚礼を挙げている。だがおしやぶは当時十才である。夜毎^{よごと}に床を並べては寝るが、それだけのことだった。時におしやぶの方から、誠一郎の蒲団^{ふとん}にもぐりこんで来ることはあったが、優しく身体^{からだ}を撫^なでて話をしていると、いつかすやすやと寝息を立てている。妹というものがいたら、こんな風に可愛いものなんだろうかと、誠一郎は日毎に美しく整^{ととの}てくるおしやぶの寝顔を陶然とみつめていたものだった。そのまま、ずるずると五年がたった今年の正月二日。いつものように別々の床に入ると、唐突におしやぶが泣きだした。どうしたのだと尋ねても、首を振るばかりで口を利^きかない。そのくせ、いつまでもしやくりあげて泣いている。おしやぶに強い予知能力のあることを、誠一郎は知っている。だから本気で不安になった。起き上^あって明りをつけ、おしやぶの顔を覗^{のぞ}きこんだ。その首に腕^{うで}が絡^{から}み、強く下に引かれた。同時におしやぶは、もう一方の手で夜具を払いのけている。そこには薄桃色に染^そめた匂^{にお}やかな裸身があった……。

次の日、まっさきに祝いに来たのは、幻齋だった。それも朝の内である。

「いやアよかった、よかった。これでやっとほっとしたよ。まったくいつまでも心配させる惣名主^{そうなぬし}さまだなア、誠さんは」

誠一郎は、三代目庄司又左衛門を名乗った時から、吉原五丁町の惣名主になっている。

それにしても幻斎の来かたが早すぎた。まさかおしゃぶが、昨夜のことを相談したわけではあるまい。まして吹聴^{ふいちょう}する筈^{はず}がなく、またそんな暇もなかった。

「どうしてご隠居は……」

笑いが返って来た。

「ここをどこだと思ってるんだね。色ごとに関する限り、この里で隠しごとが出来ると思うかね、誠さん」

驚くべきことに、早朝に起きだしたおしゃぶの顔を一目見た『やりて』が、一瞬に事態を悟り、西田屋じゅうに触れ廻^{まわ}ったと云う。

「今ごろは五丁町じゅうの連中が知ってらアね」

顔を見ただけで、どうして……と問いかけて、誠一郎は口をつぐんだ。ちょうどその時、おしゃぶが茶を運んで来たのである。そして誠一郎にも一目でそれが分った。おしゃぶの顔にも姿にも、目を瞠^{もた}るような変化が起っていた。さながら突然雪を割って春光の下に現れた、北国の花々のように、おしゃぶは匂やかに花咲いていた。肌の輝^はきも違う。ふとした仕草も違う。指一本曲げても、そこにかぐわしく女が匂った。そして息をのむほど美しかった。

終始、目を伏せた恥じらいの姿で、おしゃぶが出てゆくと、誠一郎は思わず深く息を吐いた。馬鹿^{ばか}なことだが、おしゃぶが部屋にいる間じゅう、全く無意識に息をとめていたのである。

幻斎がにたりと笑った。

「なんとも素晴らしい生き物だとは思わねえか、誠さん」
誠一郎は素直にうなずいていた……。

「おはよ」

我に返ると、当の幻斎が目の前に立っている。誠一郎は白昼おしゃぶの軀を思い描いていた自分を恥じた。幻斎が近づくのに全く気づかなかつたのだ。思えば自分もなまつたものである。

「おはようございます」

挨拶を返しながら、幻斎の表情の硬さに気づいた。

「何か……」

幻斎の声は囁きより低かった。

「義仙がいなくなった」

一瞬の裡に、誠一郎の血が凍った。

「柳生谷から消えた、裏の人間の大方と一緒にな」

「……………?!」

誠一郎が問い返すようにみつめると、幻斎がうなずいてみせた。

「宗冬さまからつなぎが入った。ついさっきのことだ」

宗冬さまとは、江戸柳生三代柳生飛驒守宗冬のことである。この柳生家の当主は、奇妙な

ことに誠一郎を愛し、嘗ての裏柳生の統帥義仙との間に立って、過分とも思える庇護を与えてくれた。その庇護の手が今もって働いていることを誠一郎は知った。

「ですが、裏も今では……」

誠一郎に右腕を刎ねられた義仙は、六年前に裏柳生の統帥の地位から転落した筈である。替って宗冬が表・裏あわせての統帥権を手中にしたと伝えられたのだが……。

幻斎が首を振っている。

「あれくれえのことで、へたばる男じゃねえよ、義仙って奴は」

傷が癒えるや否や、義仙は活動を初め、三年後には再び大方の裏柳生の者たちを配下に從えたと云う。もっとも名目だけは、今でも宗冬が表・裏双方の統帥である。だから今、宗冬の許しもなしに柳生谷を離れた裏柳生の男たちは、即座に破門されても仕方がない。破門されるとは禄を離れることであり、糧道を断たれることである。当然それに替る収入のあてがなくてはない。

「やはり御老中ですか」

これは老中首座酒井忠清をさしている。忠清は六年前、義仙と組んで吉原に圧力を加えて来た男である。だがその企みは、誠一郎の京都行と五丁町惣名主就任によって、潰え去った筈だった。

「分らねえ。あのお人も頭の切れるお方だ。今更、義仙の口車に乗って、誠さんに仇をするとは思えねえが……」

「……………」

誠一郎の眼がきびしくなっている。

「おぼえちやいねえかい。五年前、誠さんが京からけえって来た時の、あのお人のやり口をよ」

忘れる筈があらうか。まつりごとに関わる人間の、醜惡なまでの卑劣さを、誠一郎が身に徹して知ったのは、正しくあの時だったのである。

仙洞御所

今から六年前、明暦三年（一六五七）の歳の市当日に江戸をたった誠一郎は、師走の二十日には京の町に入っていた。百二十五里（五百キロ）の東海道を僅か三日で走破したのである。日に五十里（二百キロ）を駆けるといわれた、吉原の首代たちの、忍びにもまさる疾走に、誠一郎は楽々についていった。同行した野村玄意はさすがに齡でこの強行軍にはついて来れず、馬を使ったが、七組二十一人の首代たちは徒歩で、誠一郎の前後を嚴重に固めていた。この異常なまでの強行軍の理由は、酒井忠清にあった。

義仙を倒した誠一郎への当然の報復が、なんらかの公けの形をとられる前に、是が非でも京へ入らねばならない。一刻も早く仙洞御所に後水尾法皇（慶安四年に落飾されている）を訪

れ、自分が法皇の失われた御子であることを証明し、その事実を少くとも京都所司代に納得させなければならなかった。それしか、老中首座酒井忠清の強力な報復から、誠一郎本人と新吉原を守り抜く法がなかったのである。

十二月二十一日の深夜、誠一郎は仙洞御所の築地を越えた。

仙洞御所は御所東南部の一角にある。東西約一六三間、南北約一四二間、広さ約二万三千百五十坪（七六四〇〇平方メートル）の土地に、総建坪三五六二坪の仙洞御所と、三八八四坪の女院御所（仙洞御所より僅かだが大きい）が建てられたのは、寛永七年（一六三〇）十一月のことである。土地といい建物といい、内裏に匹敵する規模である。寛永十一年から十三年にかけて、仙洞御所の東北部分に、小堀遠州の手によって築庭が行われた。庭の東端の築地ぞいに細い水路を作り、ここに八つの橋をかけたという。茶の湯の露地にかわる橋めぐりの遊びのため、といわれている。

この仙洞御所は、万治四年（一六六二）の正月、一条家から出火した火事によって、内裏もろ共焼失している。二年後の寛文三年、同じ土地に再建された時、仙洞御所の総建坪二五六五坪、女院御所三八〇五坪、前よりは大幅縮小されている。

誠一郎が忍びこんだのは、この広い方の仙洞御所である。当然、後水尾法皇の御寝所がどこにあるか分るわけがなかったが、誠一郎は事前にこの御所の精密な図面を見ている。これは吉原者の恐るべき調査能力を証すものである。

誠一郎は闇の中で、生れて初めて、己れの父なる人物を見た。